

## 研究

## 小学生の「自然体験」と「生活体験」に関する実態調査

川崎 友絵<sup>1)</sup>, 園田 悦代<sup>1)</sup>

## 〔論文要旨〕

小学校中・高学年児童1,623名に対し,余暇活動における自然体験と生活体験の実態についてアンケート調査を実施した。自然体験と生活体験の関連性では,日常の自然体験が豊富であるほど生活体験の頻度が高く,豊富な自然体験は子どもの自立形成に影響するという示唆が得られた。子どもの遊び環境の実態では,遊び集団が少人数化されていること,遊びが室内化されていること,動植物との触れ合いができる遊び場を求める傾向がみられたことなど,現代の子どもの特徴が確認できた。自然体験と将来なりたいものとの関連性は認められなかったが,自然体験の多い子どもは,人や動物の世話をする職業を志す傾向がみられた。

**Key words :** 小学生, 自然体験, 生活体験

## I. はじめに

子どもは遊びを通して生きるためのあらゆる術を学ぶ。しかし,都市化がすすみ生活が多様化する現代では,子どもたちの生活は塾や習い事,テレビゲームに費やす時間が増え,遊びの時間が削減されている状況にある。また,環境破壊による自然消失で,自然と触れ合うことが非常に少なくなり,そこに息づく生き物たちと出会い感動したり,身体を鍛えたり,生活技能を培ったりという体験ができない子どもも増えている。

平成14年度より小学校では,完全週五日制が導入され,それに伴い家庭や地域では休日を有意義に過ごすため,体験学習を取り入れた様々な試みが行われようとしている。一方,自然と子どもとの関わり的重要性については,これまでに多くの報告はあるが,自然と子どもとの関

連についての研究は数少ない。

本研究は,自然体験が子どもの成長に望ましい影響を与えることを明らかにし,日常での自然体験が増えるよう支援する目的で,小学校中・高学年児童の余暇活動における自然体験と生活体験の実態についてアンケート調査を実施した。その結果,日常の自然体験が豊富であるほど生活体験が豊かになり,自立形成に影響するという示唆が得られたので報告する。

## II. 研究対象および研究方法

## 1. 研究対象

京都府,大阪府,奈良県内の小学校11校の,3年生から6年生までの児童1,623名。

## 2. 調査期間

2000年2月1日から同年2月29日

An Investigation of the Actual Conditions of "Nature Experience" and  
"Daily Experience" in Schoolchildren

Tomoe KAWASAKI, Etsuyo SONODA

1) 京都府立医科大学医学部看護学科 (教育職・研究職)

別刷請求先: 川崎友絵 京都府立医科大学医学部看護学科

〒602-0857 京都市上京区清和院口寺町東入中御霊町410番地

Tel: 075-212-5421 Fax: 075-212-5423

[1535]

受付 03. 5.26

採用 03.12.22

### 3. 研究方法

#### 1) 質問紙法 (アンケート調査) の実施

調査は自記式・無記名とし、調査票の配布・回収については、担任の先生へ委託した (回収率92.1%)。

#### 調査内容

(1)休日の過ごし方について、(2)遊び環境について、(3)自然体験について、(4)日常の生活体験について、(5)将来なりたいものについて等。なお、(3)(4)は、先行研究<sup>1)</sup>を参考に検討し作成した。

#### 2) 解析

解析対象は、1,623名のうち無効回答者と野外活動経験者349名を除いた1,157名とした。斉藤ら<sup>2)</sup>が、野外活動の経験のある子どもについては、団体に加入している子どもは加入していない子どもと比較し、自然体験・生活体験を多く経験していると報告しており、本研究でも野外活動経験の有無で自然体験・生活体験をみたところ同様の結果が得られたので、データの偏りがあると考え経験者を除外して解析した。解析対象1157名のうち、自然体験の多い子ども331名と少ない子ども313名の2群に分け、自然体験度と生活体験度の関連をみた。2群の分類は、自然体験の各11項目に対して、「何度もある」と答えている場合には3点、「少しある」なら2点、「ほとんどない」なら1点を与え、この点数を合計し、合計点数が上側四分位に入っている子どもを自然体験の多い子ども、下側四分位に入っている子どもを自然体験の少ない子どもとし、上側四分位と下側四分位で解析することにより、有意性がより明確になると考えた。「将来なりたいもの」についての職業の категорияは、子どもが記述した職業および第一生命保険が1989年から毎年調査している「大人になつたらなりたいもの」の1999年の調査結果をもとに分類した。関連性の検討はカイ二乗検定を用いた。

#### 3) 用語の定義

自然体験とは、自然に対して自らの五感を働かせて自然の様態に気づき感じとること<sup>3)</sup>であり、自然との触れ合い体験をいう。生活体験とは、日常生活の基本となる体験<sup>4)</sup>であり、自立心、道徳心、探求心などに関することがらを含

む。野外活動とは、自然環境を背景に行われる諸活動の総称<sup>5)</sup>であり、野外活動経験者とは、ボーイ (ガール) スカウト、YMCA、YWCA、キャンプ協会などの団体所属の経験がある者をいう。

#### 4) 倫理的配慮

各小学校の学校長に研究の趣旨、調査票の妥当性等について説明し、調査実施の承諾を得た。全教員には学校長より上記内容を説明していただき、調査実施の同意を得た。調査実施にあたっては、担任より児童に対して研究の趣旨と内容について説明していただき、同意を得た者についてのみ実施した。また、回答内容が教育上児童の不利とならないよう無記名とした。

## Ⅲ. 結果

### 1. 対象の属性

各学年の人数差は少なく、男女比はほぼ同じであった (表1)。家族形態は4人家族と5人家族が全体の約7割を占めていた。きょうだいは2人・3人きょうだいが多く、約8割を占めた。一人っ子は1割に満たなかった。

### 2. 子どもの余暇活動

#### 1) 休日 (土曜・日曜) の過ごし方

休日の過ごし方について、複数回答で、「室内でテレビゲーム、トランプなどをする」が709名 (61.3%)、「テレビを見たり音楽をきく」が645名 (55.7%)、「外で遊ぶ」が635名 (54.9%)の順で多かった (図1)。

#### 2) 遊び環境

遊ぶときの友達の人数は、3人以上が最も多く782名 (67.6%)で、1～2人が305名 (26.4%)、1人で遊ぶ子どもは55名 (4.8%)であった。

表1 学年別・性別人数

人 (%)

	全体	男子	女子
	1,157(100)	587(50.7)	570(49.3)
3年生	301(26.0)	146(24.9)	155(27.2)
4年生	265(22.9)	130(22.1)	135(23.7)
5年生	266(23.0)	146(24.9)	120(21.1)
6年生	325(28.1)	165(28.1)	160(28.1)

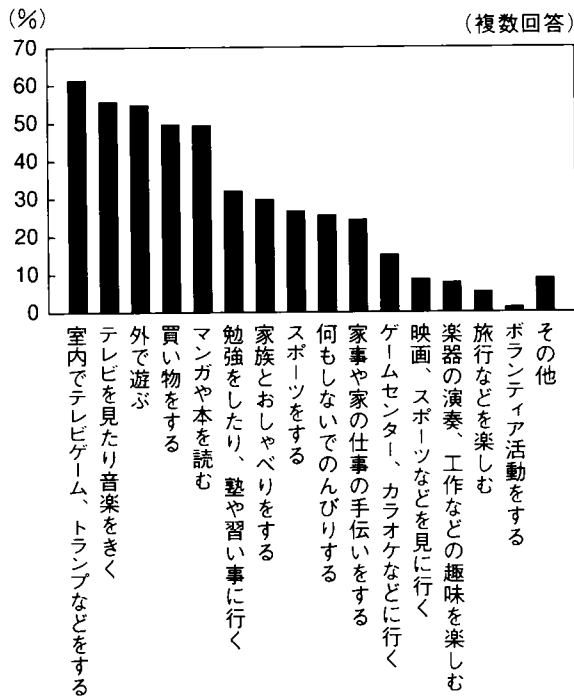


図1 休日（土曜・日曜）の過ごし方

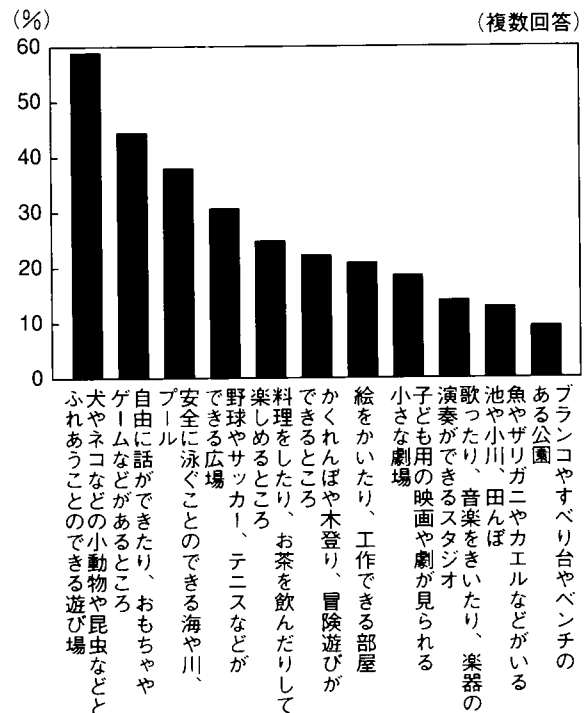


図3 近くにあったらいいと思う遊び場

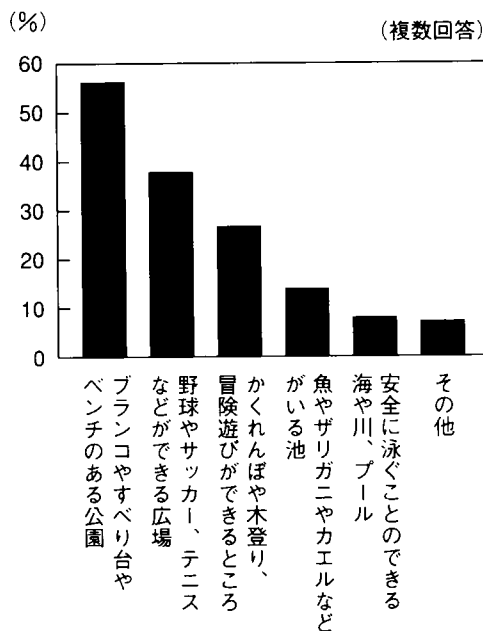


図2 家の近くの広い遊び場

家の周囲の遊び環境について、広い遊び場があると答えた子どもは、1,157名中909名(78.6%)で、広い遊び場がないと答えた子どもは233名(20.1%)であった。広い遊び場の

内訳は、「ブランコやすべり台やベンチのある公園」が646名(55.8%)と最も多かった(図2)。また、近くにあったらいいと思う遊び場について、11の選択肢から3つ回答してもらった結果、「犬やネコなどの小動物や昆虫などふれあうことのできる遊び場」が681名(58.9%)と最も多かった(図3)。

### 3. 自然体験の頻度 (図4)

自然体験について、何度もあると答えた子どもが多かったのは、「川や海で泳いだこと」が634名(54.8%)、「チョウやトンボなどの昆虫を捕まえたこと」が454名(39.2%)、「野鳥を見たり鳴き声を聞いたこと」が390名(33.7%)、「川や海で貝をとったり、魚を釣ったりしたこと」が379名(32.8%)であった。ほとんどないと答えた子どもが多かったのは、「自然観察会に参加したこと」が1032名(89.2%)、「木の実、野草、きのこなどをもって食べたこと」が790名(68.3%)、「キャンプをしたこと」が530名(45.8%)、「ロープウェイやリフトを使わずに山に登ったこと」が506名(43.7%)、「太陽が昇るところや沈むところを見たこと」が488名(42.2%)であった。

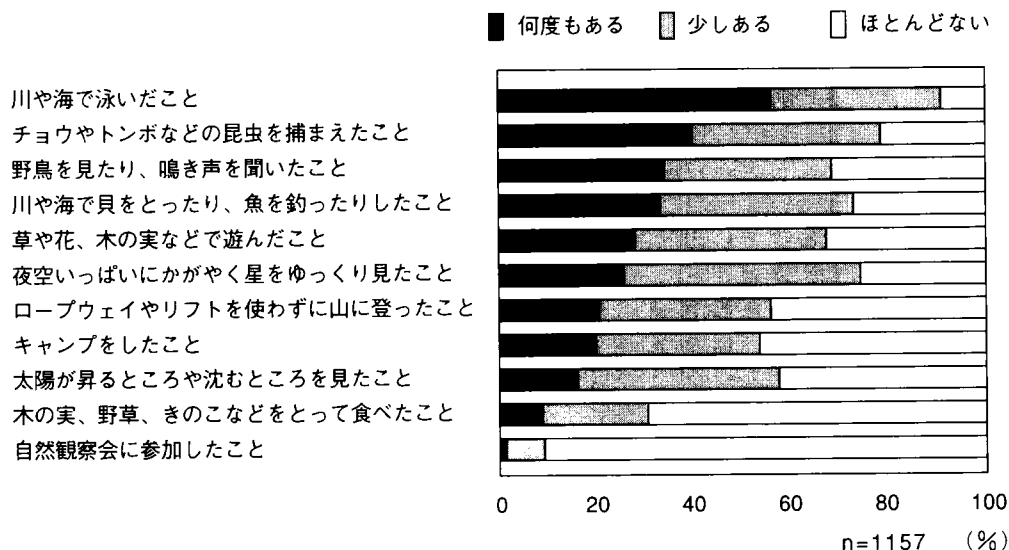


図4 自然体験の頻度

4. 生活体験の頻度 (図5)

生活体験について、いつもしていると答えた子どもが多かったのは、「朝、食事をとる」が985名 (85.1%)、「朝、顔を洗ったり歯を磨く」が862名 (74.5%)、「友達や先生や家族の人と話をする」が764名 (66.0%)、「あいさつをする」が622名 (53.8%)、「動物や植物を大切にする」が590名 (51.0%)であった。していないと答えた子どもが多かったのは、「文学作品などの本をたくさん読む」が497名 (43.0%)、「自分

で計画を立てて勉強する」が367名 (31.7%)であった。

5. 子どもの自然体験度からみた生活体験の頻度 (表2)

生活体験の全項目について、いつもしていると答えた子どもの割合は、自然体験の少ない子どもより自然体験の多い子どもの方が高く、していないと答えた子どもの割合は、自然体験の多い子どもより自然体験の少ない子どもの方が高く、関連が顕著であった。

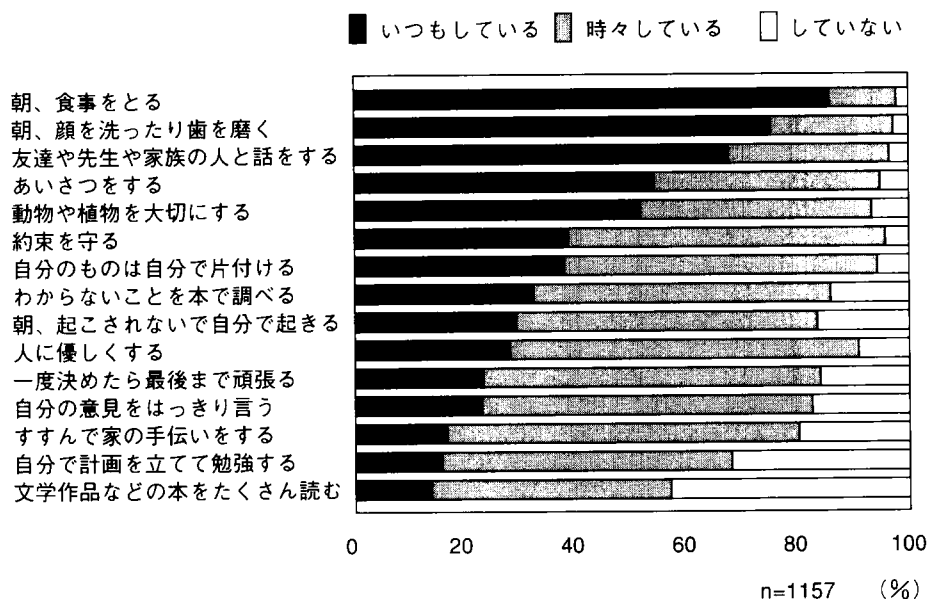


図5 生活体験の頻度

表2 子どもの自然体験度からみた生活体験の頻度 (%)

生活体験	自然体験		いつも している	時々 している	していない	$\chi^2$
	(多) n=331	(少) n=313				
①朝, 起こされなくて自分で起きること	多		35.7	52.6	11.8	**
	少		21.5	58.7	19.9	
②朝, 食事をとること	多		89.7	8.5	1.8	
	少		83.3	13.5	3.2	
③朝, 顔を洗ったり歯を磨くこと	多		79.8	18.1	2.1	*
	少		71.0	23.6	5.5	
④あいさつをすること	多		67.4	30.5	2.1	**
	少		39.6	50.5	9.9	
⑤自分のものは自分で片付けること	多		42.6	54.1	3.3	**
	少		30.7	62.5	6.8	
⑥すすんで家の手伝いをすること	多		25.1	60.7	14.2	**
	少		9.4	66.5	24.2	
⑦自分で計画を立てて勉強すること	多		23.3	55.0	21.8	**
	少		11.3	44.7	44.1	
⑧一度決めたら最後まで頑張ること	多		33.2	58.3	8.5	**
	少		16.0	57.8	26.2	
⑨文学作品などの本をたくさん読むこと	多		23.6	49.4	27.0	**
	少		7.7	36.0	56.3	
⑩約束を守ること	多		43.8	54.1	2.1	**
	少		31.9	60.7	7.4	
⑪自分の意見をはっきり言うこと	多		32.5	58.1	9.4	**
	少		15.8	57.9	26.4	
⑫人にやさしくすること	多		30.5	62.5	7.0	
	少		25.7	63.3	11.0	
⑬動物や植物を大切にすること	多		67.7	28.7	3.6	**
	少		37.7	51.3	11.0	
⑭友達や先生や家族の人と話をすること	多		74.6	24.2	1.2	**
	少		55.0	38.2	6.8	
⑮わからないことや知りたいことを人に 聞いたり本で調べたりすること	多		44.4	49.2	6.3	**
	少		19.5	57.8	22.7	

\*p&lt;0.005 \*\*p&lt;0.001

全項目の中で、「朝, 食事をとること」、「朝, 顔を洗ったり歯を磨くこと」については、両群とも「いつもしている」と答えた子どもの割合は高く、他の項目より高い比率を示していた。

道徳心に関連する項目の、「あいさつをすること」、「動物や植物を大切にすること」、「友達や先生や家族の人と話をすること」、「約束を守ること」については、自然体験の多い子どもの

方が体験頻度が高く、4項目ともに関連が顕著であった ( $p<0.001$ )。しかし、「人にやさしくすること」は関連がなかった。探求心に関連する項目の、「文学作品などの本をたくさん読むこと」、「わからないことや知りたいことを人に聞いたり本で調べたりすること」についても関連が顕著であった ( $p<0.001$ )。自立心に関連する項目の、「朝, 起こされなくて自分で起

きること」、「自分のものは自分で片付けること」、「すすんで家の手伝いをする事」、「自分で計画を立てて勉強すること」、「一度決めたら最後まで頑張ること」、「自分の意見をはっきり言うこと」についても、自然体験の多い子どもの方が体験度が高く、関連が顕著であった ( $p < 0.001$ )。

とんどの職業で自然体験の多い子どもの方がなりたい割合が高かった。そのなかで、「医師」、「博士」、「警察官・消防士・自衛隊」、「動物に携わる仕事」の比率は60%以上と高かったが、有意な差はみられなかった (図6)。

6. 自然体験度からみた将来なりたいものの比率

将来なりたいものについて、「決めている」と答えた子どもは659名 (57.0%) で、「決めていない」は132名 (11.4%)、「わからない」は359名 (31.0%) であった。

自然体験の多い子どもでは、決めていると答えた子どもが217名 (65.6%)、自然体験の少ない子どもでは155名 (49.5%) で、自然体験の多い子どもの方が有意に高かった ( $p < 0.001$ )。決めていると回答した子どもの中で具体的な職業を記載しているのは656名 (56.7%) で、職業を16のカテゴリーに分類し順位を示した (表3)。また、職業を記載している子ども656名中、自然体験の多い子どもは359名 (54.7%)、少ない子どもは169名 (25.8%) で、自然体験の多い子どもの方が明確に職業を記載しており、ほ

表3 将来なりたいもの

n=656, 人 (%)

1位	スポーツ選手	174 (15.0)
2位	芸術家	68 ( 5.9)
3位	芸能人	65 ( 5.6)
4位	動物に携わる仕事	60 ( 5.2)
5位	食べ物屋	56 ( 4.8)
6位	保育士	38 ( 3.3)
7位	看護師・助産師	30 ( 2.6)
8位	販売業	25 ( 2.2)
9位	美容師	23 ( 2.0)
9位	植物に携わる仕事	23 ( 2.0)
11位	先生	21 ( 1.8)
12位	警察官・消防士・自衛隊	15 ( 1.3)
13位	博士	14 ( 1.2)
14位	医師	13 ( 1.1)
15位	大工	11 ( 1.0)

※複数回答を含む

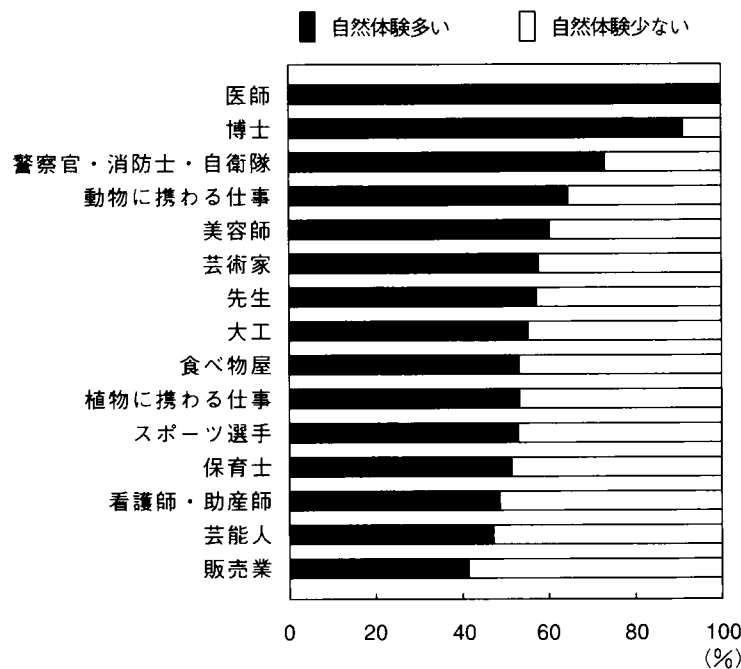


図6 自然体験度からみた将来なりたいものの比率

## IV. 考 察

### 1. 子どもたちの遊び環境について

休日の過ごし方は、「外で遊ぶ」子どもが5割を越えたが、「室内でテレビゲーム、トランプをする」など室内での遊びが顕著に多かった。また、「勉強したり、塾や習い事に行く」が3割以上みられることから、余暇においても拘束されている子どもの姿がうかがえる。遊ぶときの友達の人数は、3人以上が最も多いが、1人ないし2人、1人で遊ぶ子どもが全体の3割もみられ、集団遊びを好む時期の子どもとしては少ないと思われる。この子どもの遊び集団の少人数化と遊びの室内化は、深谷らの調査<sup>5)</sup>でも指摘されており、現代の子どもの特徴と考えられる。

遊び環境では、家の周囲に広い遊び場がある子どもは7割以上いるが、「ブランコやすべり台やベンチのある公園」など人工的に造られた遊び場が圧倒的に多かった。一方、近くにあったらいいと思う遊び場は、「犬やネコなどの小動物や昆虫などと触れ合うことのできる遊び場」が最も多く、住宅の高層化により動物等を飼えない状況や、身近な生活圏の自然破壊により生き物と触れ合う機会を得にくい状況から、ふだん体験できないことへの願望が表れていると思われる。

以上のように、本研究においても、現代の子どもの遊び環境について問題となっている、子どもの遊び時間や遊び友達、遊び場所が失われていく傾向がみられた。

中村<sup>7)</sup>は、自然体験は、子どもたちに自然や生命に対する畏敬の念を育てると述べている。自然体験の減少は、子どもと動植物や生き物との触れ合いの減少であり、すなわち、子どもの心に自然や生命に対する畏敬の念が育ちにくくなる危険性がある。我々は、自然体験を子どもの貴重な体験として認識していくことが大切であると考えられる。

### 2. 自然体験と生活体験の関連性

道徳観に関連する生活体験は、自然体験の多い子どもの方が頻度が顕著に高く、ふだんの生活では得にくい機会が増えることにより、その

中で自然に規則を守ることや協調性などの道徳観が培われていったものと考えられる。

探求心に関しても、自然体験を通して、子どもたちは主体的に物事を考え、自ら解決していくという過程を経験し習得していったものと考えられる。

自立心に関連する生活体験も、自然体験の多い子どもの方が頻度が高く、関連が顕著であった。これは、自然体験の中で、能動的に行動することを身につけ、自立への発達が促進されていったものと考えられる。

生活体験の全項目について、自然体験が豊富な子どもほど、生活体験の頻度が高かった。このことは、自然体験を通して、子どもは様々な事物について見聞きし、触れ、感動したり、驚いたりしながら、試行錯誤を繰り返し、「自然の姿とは」、「自分の生活の在り方とは」、「社会の在り方とは」等を学んだためと考える。さらに、そのことにより子どもたちは、自分以外の生き物に思いを馳せ世界観を広げたり、物事に取り組んでひとりでやり遂げることの素晴らしさを知ったり、また今後の行動への動機付けになったりと、基本的な生活習慣はもとより、道徳観や探求心の向上につながっていったものと考えられる。斉藤らの研究<sup>8)</sup>においても、自然体験が多いほど、子どもにとって自主性、自立性を育てることに有効であり、よりよい社会性と生活態度を実践する能力を養うという結果が得られており、本研究も同様のことがいえた。

### 3. 自然体験と将来なりたいものとの関連性

将来の職業について考えているということは、社会的自立の発達が進んでいると思われる。自然体験の多い子どもの方が職業を「決めている」割合が高いのは、自然体験を通して、人との交流をもつ機会が増えることで、職業に対する情報を得やすいことや、自分の将来に対して考える機会をもちやすいたことが考えられる。子どもたちが、キャンプをしたり、川や海で泳いだりするという体験には、子どもと関わる家族や大人たちや友だちが存在すると思われ、自然体験と人との交流は密接に関係していると考えられる。したがって、子どもが日常的に様々な体験の機会を得るためには、地域での諸活動が極め

て重要<sup>9)</sup>となる。また、体験活動は子ども自身が意欲をもって物事に取り組むチャンスを与え、社会生活の中で生きる意欲を培ったり、そのために必要な生活技術の習得と深い関連をもっていると考えられる。人間の達成すべき発達課題の一つとして、社会的自立は必要不可欠なことであり、これを高めうる自然体験の意義は大きいと思われる。本研究では、自然体験度と将来の職業との関連性は認められなかったが、自然体験の多い子どもは、人や動物の世話をする職業を志す傾向がみられ、たいへん興味深いことである。引き続き追求していきたいと考えている。

## V. ま と め

小学校中・高学年児童の余暇活動における自然体験と生活体験の実態調査により、自然体験と生活体験の関連性および自立形成との関連性について以下のことが示唆された。

- ① 自然体験の豊富な子どもほど生活体験の頻度が高い。
- ② 豊富な自然体験は、子どもの自立形成に影響する。

最後に、本調査に御協力をいただきました皆様方に深謝いたします。

## 文 献

- 1) 土屋隆裕. 調査データに見る子どもの体験活動の実態. 青少年問題 1999;468(8):30-38.
- 2) 斉藤徹瑛, 服部英二, 舟橋和夫他, 子供たちの自然体験・生活体験に関する調査研究. マツダ財団研究報告書 1998;11:31-45.
- 3) 佐島群巳, 環境教育. 佐島群巳, 鈴木善次, 木谷要治他, 環境教育指導事典. 初版. 東京:国土社 1996:42-43.
- 4) NHK放送世論調査所編. 日本の子どもたち 生活と意識. 初版. 東京:日本放送出版協会. 1980.
- 5) 東原昌郎, 野外教育活動. 佐島群巳, 鈴木善次, 木谷要治他, 環境教育指導事典. 初版. 東京:国土社 1996:266-267.
- 6) 深谷昌志, 深谷和子. 子どもの放課後の生活. モノグラフ・小学生ナウ21 (3), ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総研 2001.
- 7) 中村和彦, 野外体験. 中野重人, 谷川彰英, 無藤隆他, 生活科事典. 東京:東京書籍 1996:262-263.
- 8) 斉藤徹瑛. 自然体験・生活体験等に関する調査. 川村学園女子大学. 1995.
- 9) 前掲書